

自然の風景と歴史の風景 —古い満洲を訪ねて

作家 岡田和裕



ご紹介いただきました岡田和裕です。

1937年、昭和12年に旧満洲国安東市で生まれました。現在の丹東市。鴨緑江をはさんで北朝鮮と向かい合う町です。終戦の翌年、数えて10歳の時に引き揚げてきた典型的な満洲2世です。

ある時、満洲研究で著名な大学の先生から「戦前、満洲にいたから、満洲のことは、一番よく知っているという考えには賛同できない」と言われました。まったくそのとおりで、私程度の幼児体験はむしろ時として邪魔になることがあります。意識しないでもセンチメントになる部分があるからです。

しかし、かといって戦前を知らない世代の方が1度や2度満洲に行って、満洲がわかつたように語る満洲論にも賛同しかねます。また戦前の資料、ペーパー類

も、ある立場の人がある目的のために書いたものが多く、必ずしも正しく満洲を伝えているとは言えません。

満洲2世に共通して言えるのは、彼らの体内には未開の地・満洲に渡った父母、あるいは祖父母からのDNAが滞留しているということです。大同学院卒業生を父に持つ人の集まる「大同2世の会」というのがあります。大同学院に縁もゆかりもない私が入っているのは、この人たちに同質のものを感じるからです。彼らも父のDNAを引きずっているのではないかと勝手ながら思っているからです。

私が満洲に惹かれるのは、満洲が日本の近現代史に不可欠な存在だからです。

侵略か侵略でないかといえば、明らかに侵略です。しかしそのことをいつまでも引きずるのは疲れるばかりでまったく満洲、それも昔が残る辺境の満洲をお話させていただきたいと思います。

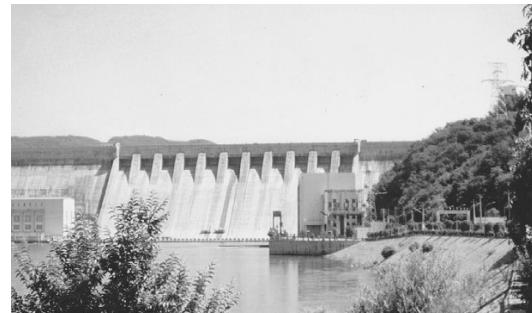
龍豊線・豊満ダム

吉林から20キロ、松花江を北上した所に豊満ダム・水力発電所があります。発電の他、洪水防止、灌漑も兼ねた多目的

ダムで、70万キロの電力と15万町歩の田畠を生み出す、星野直樹言うところの「満洲国の大記念塔」でした。敗戦直前に一部を残して完成、1億円の予算がオーバーして2億円かかったとか。豊満ダムには2度行きました。2度目に松花江にそつて車を走らせていると、左手の山の木々の間から、錆付いたレールが



廃線となった線路が残っていた



豊満ダム

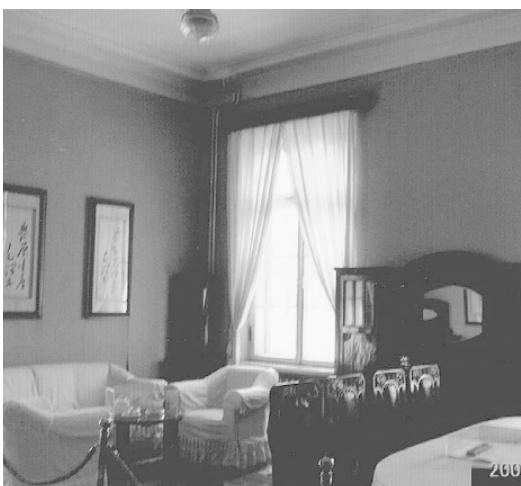
見えました。「何か」と聞くと「満洲国時代の廃線だ」という。豊満ダムは後回しにして廃線の跡を追うことにしました。満洲国はダムと発電施設に必要な膨大な物資を運ぶために鉄道を敷いたのです。龍豐線です。吉林の龍潭山から大豊満までの22・4キロ。

龍豐線は戦後しばらく現役でしたが利用者が減ったことで廃線になりました。ダムの広さは、ほぼ琵琶湖に匹敵し、30分ほど遊覧しましたが、空は抜けるよう青く、ゴミ一つなく実に爽快でした。そんなことから映画のロケーションもしばしば行なわれたそうで、その時のセットの駅舎には、不思議なことに今も人が住んでいました。

ハルビン

ハルビンには3度行きましたが、いつも通過点となつて、じっくり腰を据えて留まつたことがありません。ハルビンは歴史的にも奥の深い町。1週間、10日滞在しても見尽くすことはないでしょう。

ハルビンといえば悪名高い「731部隊」へは2度行きました。ハルビンに行ったら、やはりあそこは見ておくべき所だと思います。



今は要人のハルビンにおける宿舎



日本の特務機関があった豪邸が残っている

次はハルビンにあつた日本の特務機關を紹介します。元はポーランド人商人の豪邸。外国人は入れないことになつていましたが、たまたま行つたのが土曜の昼頃で、管理責任者が帰つて掃除の女性だけだったので頼むと入れてくれました。ビニールの袋を履いて、撮影はいいけど、フラッシュはたかないという条件で入館が許されました。私は中国語がまるでダメなので、くわしい説明は出来ませんが、現在は黒龍江記念館で、中国共産党の幹部がハルビンに来たら、かならず立ち寄る所だそうです。外観も立派ですが、内部も高級木材をふんだんに使つた豪華な造り。3階には毛沢東が使用したベッドがあり、壁には毛沢東、朱徳などくつかあって、現存する日本総領事館なども一時はそうだったようです。

虎頭

関東軍は対ソ戦に備えてソ連国境一帯14か所に巨大地下要塞を築きました。ハバロフスクと



なぜか蓄音機が

及ぶ巨大要塞が完成。その一部が日中共同の調査隊によつて発掘され、現在、陳列館として公開されています。

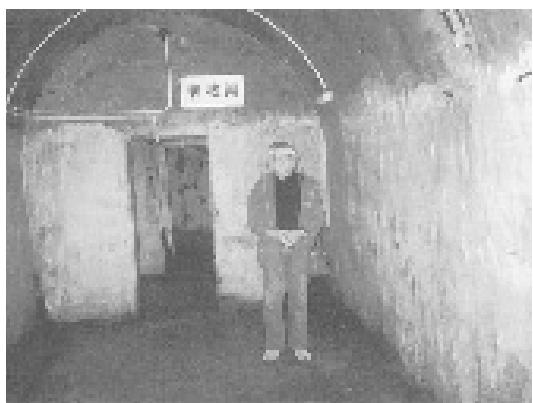
長さ8キロに

40メートル、

ウラジオストクのほぼ中間、ウスリイ河を挟んでソ連のイマンと対峙する虎頭要塞はハイラル要塞と並ぶ重要なポイントでした。昭和9年に着工して14年末には深さ



展示室には古い砲弾多数



将校室前の筆者

写真の陳列品の中に、なぜか蓄音機がありました。また私が立っているのは地下の将校の部屋の前です。

虎頭には陸軍唯一の40センチ重砲が設置されていて、太平洋戦争末期、ソ連軍が侵攻して来た時、イマン鉄橋に向けて火を吹きましたが、背後の弾薬庫に敵弾が命中、砲台もろとも吹き飛びました。

この巨砲は東京湾の富津にあつたのを解体して鉄道と船とで満洲へ運び、ハルビンで組立直して、満鉄が特別編成した20両の車両で虎頭に運んだもので、その話をすると1時間や2時間はかかります。



中国側ゲート



鉄道橋に列車が

図們大橋と図們江。橋の中程に国境の標識があります。対岸が北朝鮮です。白い建物は、すべて軍関係のものだそうです。反対の中側には新しいゲートがあります。このゲートはビルの4階ほどの高さで、最上階には切手とかコインとか装飾品とか、北朝鮮の物産を売る売店があります。屋上の望遠鏡を覗いて見ましたが倍率ゼロで肉眼と同じでした。



中朝国境の橋

洲を繋ぐ橋は線路と歩道が並行していましたが、後に交通量が大幅に増えたことで鐵橋は100メートルほど上流に移りました。たまたま北朝鮮から中国に向かう列車に遭遇し、あわててシャッターを切りました。週に数回行き来する不定期便で、ガイドも初めて見たといつていました。機関車は中国鐵道のもので、積み荷は空、北朝鮮に物を運んで行って

帰りの便は、たいがい空なのだそうです。

一眼望三国—珲春防川

吉林省は日本海に出口があります。中国の領土は日本海の16キロ手前まで。科学調査船しか図們江を通ることを許されていません。1860年の北京条約でウスリー河以東の地をロシアに譲渡したの



張鼓峰事件の張鼓峰が左端にかすかに写っている



これは絵葉書を拝借。三国の位置がよくわかる

図們

図們そのものは古い町ですが、日本人の移住が進んだのは満洲建国からで、駅舎も含めて日本時代の建物は何も残っていないません。当時の朝鮮と満

洲を繋ぐ橋は線路と歩道が並行していましたが、後に交通量が大幅に増えたことで鐵橋は100メートルほど上流に移りました。たまたま北朝鮮から中国に向かう列車に遭遇し、あわててシャッターを切りました。週に数回行き来する不定期便で、ガイドも初めて見たといつていました。機関車は中国鐵道のもので、積み荷は空、北朝鮮に物を運んで行って

帰りの便は、たいがい空なのだそうです。

が千載の悔いを残すことになったのです。その後、再三、ロシア、北朝鮮と交渉しても、譲つてもられないのです。

現在も中国、ロシア、北朝鮮の境界は図們江。2度目に図們に行つた時、そのことを知つて行ける所まで行くことにしました。琿春の市街地を出て東に向かうと自然保護区になつていて、とても綺麗です。世界自然遺産に登録したほど自然が残っています。図們江は細く、浅く、右歩いても渡れそうです。左がロシア、右の図們江の向こうが北朝鮮。いくつか橋がありますが、見えるのは軍の施設と兵士の姿だけ。風景にはそぐわない重苦しい空気に包まれていました。30キロほど行つた所が行き止まり、日本海は16キロ先です。

展望台がありました。一眼望三国、展望台からは足下に中国、右手に北朝鮮、左手にロシアが見えます。一点に立つて三国が望めるのが珍しいということで、観光の目玉になっています。

左手遠くに張鼓峰が見えました。

現地名ハサン。1938年、昭和13年、ノモンハンの前哨戦ともなった張鼓峰事件の現場です。まさか張鼓峰の現場が見られるとは思つ

てもいませんでした。日本軍はソ連の機械化部隊に惨敗しました。それでも懲りずにノモンハンでまたも惨敗。ハサンからちよっと視線を右に移すと鉄橋が見えます。北朝鮮の将軍様、飛行機嫌いの故金正日はロシアに行くときはこの鉄橋を使いました。文字通り将軍様専用で普段は鎖で封鎖されているそうです。

綏芬河

牡丹江の東方に位置するロシアとの国境の町で、ポグラニーチナヤ、国境という意味のロシア名があります。駅舎と構内、駅舎も構内も中国といふよりヨーロッ



古い教会が残っていた



綏芬河駅

パ風です。満洲に行く目的の1つは駅舎と駅頭の写真を撮ることで、都会はともかく地方には、満鉄時代の駅舎が多く残っています。駅舎もホームも実に綺麗に整備されているのに驚きます。1日に数便しか通らないのにホームには花壇があって筹のはき目がついているのです。中国人の社会性を、とやかくいう人がいますが、これには驚かされます。

19世紀末、ロシアが東清鉄道を敷設した際に建てられたという教会が、今も駅前の同じ場所にありました。60歳代の女性と娘さんとお孫さんが迎えてくれ、



ロシア人の観光客

「せっかく来たのだから見て行け」と内
部を案内してくれました。「位置は少し
変った。その際、建物の外形も変ったが、
内部は昔のままだ」とのこと。現在、週
末に1便、ロシアからの直航便があり、
ちょうどその日にあたつたこともあって、
横文字のブランド・ショップが立ち並ぶ
メインストリートにはロシア人の往来が
目立ちました。富裕層なのでしょう、若
い女性はファッショニモードルを思わせる
ほど美人でした。

町中には日本総領事館、特務機関の建

物が残っていました。領事館は英語学校、
特務機関は省の施設になっていました。
綏芬河は19世紀末、東清鉄道建設当時、
東の拠点になったところで、少数ですが
日本人が働いていました。女郎屋のオヤ
ジと女たちです。この時代、ハルビンに
も日本人の女郎屋がいくつもありました。
綏芬河は土地が貧しく金になるのは野性
の人参とケシぐらいのもので、かつては
町全体が密輸で食っていた時代がありま
した。1933年に日本軍が駐屯するよ
うになって、ようやく治安が保たれるよ
うになりました。

私が満洲に魅力を感じている町の1つ
がこの綏芬河です。空気も景色もきれい、
町にも彩りがあります。しかし冬は厳し
いそうです。ともかくロシアと中国、過
去と現代がこれほどうまくミックスした
場所は満洲でも、ここだけです。

大栗子

大栗子は皇帝溥儀が満洲国の消滅と自
らの退位を宣言した所です。吉林省の東
南の端です。一度行ってみたいと思って
いましたが、なかなかそのチャンスがあ
りませんでした。私が行ったのは2000
年ですが、日本人は5組目でした。

溥儀が降り立った駅舎は、
今は鉱石を運ぶだけの無人
駅ですが、昔
とまったく変わ
っていないそ
うです。溥儀が
仮宮廷として
数日を過ごし
た東辺道開発
会社大栗子鉱
業所の所長宅
は駅から車で
20分ほど、溥
儀の記念館に
なっていまし
た。たいした
陳列品はあり
ませんでした
が館内は撮影
禁止。1枚盗み撮りした写真には、溥儀
の退位宣言に同席した人たちが写ってい
ます。

日本時代の鉱業所の本社、社宅も昔の
まま。鉱業所そのものも稼働していま
すが、かつて東洋のザイールとまでいわ
れた面影はありませんでした。



溥儀が降り立った大栗子の駅舎



内部に飾られた写真



「偽滿皇帝溥儀行宮」とある

黒河

黒河というと石光真清を連想します。密偵として歴史に残る人物です。日露戦争前夜、石光は黒河の対岸ブラゴベシチエスクに住んでいました。ロシアが義和団事件の報復としてブラゴ在住の約4千人の中国人を殺して黒龍江に放棄した「アムール河の流血」を目撃した数少ない日本人の1人です。

3度目の黒河で、かつてここに居住された日本人が書かれた市内の略図を手に街を巡りましたが、日本の特務機關や軍・政府関連施設が目にきました。なるほど黒河は国境の町、スペイの町だと痛感しました。普通の人は阜新しかったでしょう。日本時代の建物はつたや旅館と大同薬房、国民小学校がありました。

黒龍江そのものはいつの時代も穏やかです。満洲は三方を山脈に囲まれていますが、平らなところは平らなのです。座頭市とならぶ勝新太郎の当たり役に兵隊やくざの大宮貴三郎がありますが、あの舞台が黒河の近くの孫吳です。有馬頼義の原作には「大連から1300キロも奥地に入った孫吳でも標高は百米か三百米しかない」とあります。

満洲も黒龍江も平らなのです。よく見ないと流れているのかいないのかわかりません。試しに木の葉を流してみると確かに左から右に流れていますが、私が歩くほどの速度でしかありません。

川の中程に停泊しているロシアの警備艇の上では半裸のロシア兵士が虫干しをしていました。

黒河は戦後、ソ連に抑留された日本人の移送ルートの1つでした。当時は舟を繋いで橋として日本人と掠奪物資を運び終ると舟橋は解体されました。そもそも黒龍江は橋のない川として有名で



日本時代のつたや旅館

した。現在はハバロフスクに橋があるそ
うですが。

ソ連は病弱な日本人を黒河に残し、つ
たや旅館や南崗の満鉄社宅に約700人
が収容されていたそうです。南崗に行っ
てみましが満鉄社宅はすぐではなく、大型
資材の置場になっていました。

遊覧船は黒龍江がゼーア河と合流する
地点まで行きます。まるで海です。ゼー
ア河は金床の多いことで知られ、日露開
戦以前、日本人も働いていました。

黒河を少し下った黒龍江沿いにアイグ



対岸のブラゴベシチエンスク



アイグン歴史陳列館

ンがあります。アイゲン条約が締結され
た場所です。「アムール河の流血」の後、
ロシアはアイゲンにも攻め入り、周辺の
町を焼き付くし、数万人の住民を殺害し
ました。その時、ただ1つ類焼を免れた
アイゲン城の望楼が現存します。隣り合
わせてロシアの暴虐を伝えるアイゲン歴
史陳列館があります。

アイゲンには2度行きましたが、展示
物と表現方法は次第に過激になり、今は
映像と音響を併せて「アムール河の流血」
を再現しています。

満洲に記念館は数多いですが、対象が
日本でないのは、丹東にある「朝鮮戦争
記念館」とここだけです。丹東の記念館
は、まじめに見ると3時間はかかる規模

で、朝鮮戦争の記念館としては
中国最大のものです。

よくいわれることですが、風
景には自然の風景と歴史の風景
があります。自然の風景は美し
くなければ、通り過ぎるだけの
風景ですが、そこに歴史を重ね
て見ると、いつまでも見飽きな
い奥行のある風景になります。

関が原は新幹線で通ればあっ
という間です。降りてまで見よ
うという風景ではありません。
しかしここは戦国時代、最大の戦闘のあつ
た所です。あの戦国絵巻を頭に入れて見
れば、1日いても見飽きない場所です。

満洲もそうです。ロシア、日本時代が
忍ばれる痕跡が、至る所にあります。そ
れが満洲旅行の醍醐味です。

(5月21日・東北フォーラム)

講師略歴（おかだ かずひろ）

1937年 旧満洲国安東市生まれ

作家。記者、編集者を経

て文筆活動に入る
著書 『満洲辺境紀行』など多数